

ホーム > レビュー/プレビュー > キュレーターズノート > 「不確かさ」をめぐる問いかけ——山下麻衣+小林直人「嵐気楼か。」

キュレーターズノート

「不確かさ」をめぐる問いかけ——山下麻衣+小林直人「嵐気楼か。」
 野中祐美子 (金沢21世紀美術館)

2022年01月15日号
 シェアする | LINEで送る | ツイート

昨年の9月下旬から12月にかけて黒部市美術館で開催された展覧会「嵐気楼か。」を紹介する。本展は、山下麻衣+小林直人による個展で、そのタイトルからして実に不思議な印象を漂わせるものだが、展覧会鑑賞後改めてこのタイトルに立ち返ると、これほどあの展示にふさわしいタイトルもないのかもしれないとも思う。

本展覧会は作家のキャリアのなから新旧入り混じった六つの作品で構成され、そのうちのひとつは展覧会タイトルとも直結する嵐気楼を取り入れたプロジェクト型の作品《Infinity-mirage》(2021)である。展覧会の内容を知らぬ前かこの「嵐気楼」という言葉だけがひとり歩きし、「嵐気楼が見える」という噂とともに、個人的には見たことのない嵐気楼への期待を抱きながら会場へ向かった。

人と自然、ゆらぐ境界

展覧会紹介文のなかで、作家の紹介が次のようになされていた。

「作家は、いわゆる一般的価値の代替案を探るような豊かなアイデアを、非経済的で非効率的、また労働のような行為を伴うユニークな手法等を通じて、世界との関係や社会の構造を再考してきた。また、動物や自然環境に意識を向け、人間中心主義的な視点から外れた地平で世界を見つめようと試みてきました。」

山下+小林の作品をまとめたあたりで観たのは今回が初めてであったが、展示された6点の作品からもここに紹介されているような二人の作品制作への姿勢のようなものを強く感じた。とりわけ本展では、人と自然についてさまざまな考察が反映された作品が展示され、自然豊かな美術館近隣の環境を取り込んだ「人と自然とのゆらぐ境界について現在進行形で展覧会」として開催生も掲げられている。

私がこの展覧会を素晴らしいと思った理由はいくつかあるが、ひとつ挙げるとするならば、人と自然との距離感を探りながら、究極的には人間とは何かという大きな問題を、とてもシンプルな方法で身近な環境や人間を通して考えさせてくれるところに驚きと共感を持った点にある。



山下麻衣+小林直人「嵐気楼か。」(黒部市美術館) 展示風景 [撮影: 柳原良平]

消費社会における自然への介入

詳しく展示の内容を見てみよう。



山下麻衣+小林直人「Release of mineral water」(2004) 黒部市美術館での展示風景 [撮影: 柳原良平]

まず、展覧会の導入部に作家にとって人と自然の関係を考えるきっかけとなった初期の作品《Release of mineral water》(2004)が実際に黒部の水を飲めるウォーターサーバーとともに展示された。作品の内容としては、ドイツのミネラルウォーター「トニースタイナー」を日本のウォーターサーバーに入れ、それをドイツの源流(アプフェル地方)まで「放流」しに行くというドキュメント作品である。作家が水を育みたい、飛行機に乗り、電車を乗り継ぎ、ライン川近くの森を歩き、源流に辿り着き、ペットボトルから水を「放流」する姿はなんとも滑稽に見えるが、一方でそれが滑稽に見えてしまうほどに消費社会に書き込まれている自分自身にも気づかされる。そもそも、水は誰のものなのか? そんな疑問すら抱かずに、当たり前のように水を消費してきたわけだが、消費社会における水の循環をきっかけに、大きな自然の疑問に目を向けるようになる。併せて、ウォーターサーバーに入った「黒部のめぐみ」という商品を会場で実際に飲むことで、地域住民にとっては自分たちが住む黒部周辺の自然や、そこから循環する消費システムについてのリアリティをより強く感じることだろう。鑑賞者は、展示室に入る前にもっとも身近な商品であるミネラルウォーターの循環によって、人と自然の関係を変えていく。



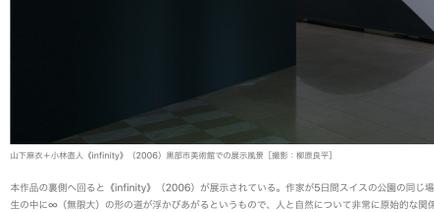
山下麻衣+小林直人「人(人)自然」(2021) 黒部市美術館での展示風景 [撮影: 柳原良平]

展示室に入るとすぐに迎われるのが、大画面にプロジェクトで映し出された新作《人(人)自然》(2021)である。展覧会タイトルにある「嵐気楼」という言葉によって、最初もひとつの新作《Infinity-mirage》がまるでメインの作品であるかのような印象を持っていたが、実際に展覧会を鑑賞してみると《人(人)自然》は《Infinity-mirage》も含むすべての作品を包括するような存在であり、展覧会の輪を定める作品であることがわかる。それゆえ展示室の中央でとても象徴的な作品として展示されているように思う。

この作品は、富山県朝日町の山間にある大平(だいら)という地域で作家が自転車で行き回っている様子を映像に捉えたものである。大平は富山県と新潟県の境川-大平川の中流から源流にかけての流域一帯に広がっており、険しい山地に影響を受けてきた大平の集落には現在、9戸9人が暮らしているようだ。

走行中の自転車のタイヤには「人と自然」「人も自然」「人も自然」「人も自然」「人も自然」「人も自然」「人も自然」という文字が20秒ごとに入れ替わりながら浮かび上がる。自転車で通り過ぎる風景には、境川に戦後につくられた水力発電所、草が繁る建設跡地、山に囲まれた小さな集落、太陽光パネルなど、かつての痕跡を含めさまざまな構造物があり、各時代の人と自然の関わり方や人が自然にどう介入しているかのかが垣間見られる。走行中の風景の随所に散りばめられたそれらの情報は鑑賞者によって見え方はさまざまであるが、タイヤに浮かび上がる文字が文字に導かれながら、人と自然の関係性とその境界について考える重要な作品である。「人」と「自然」という単語をつなぐ助詞の語を足さなければ、両者の関係の在り方がつらりと変わる。それは日本語の精緻でもあるし、そんなシンプルな言葉の助けかけががとても大きな問題を鑑賞者に突きつけてくる。作家の巧みな表現に脱帽した。

二つの∞(無限大)



山下麻衣+小林直人「Infinity」(2006) 黒部市美術館での展示風景 [撮影: 柳原良平]

本作品の裏側に回ると《Infinity》(2006)が展示されている。作家が5日開きの公園の同じ場所を走り続け、徐々に芝生の間に∞(無限大)の形の道が浮かびあがるといわれる。人と自然について非常に原始的な関心を提示した作品ともいえる。山に散道があるように、人や動物が歩いたところは道になり、関与がなければ道は再び姿を消す。本作品も作家が5日間、という時間を費やし、自らの身体を磨き上げつづけたものであり、何も資本を持っていない人間は、自分の時間と労力が資本となり価値が生まれるという点で、作家曰くマルクスの影響を受けた作品だ。自然へ人間的な関与という点で両者の《人(人)自然》と影響しながら、人と自然との関係性への問いが投げかけられる。一方、別の方法で自然現象という自然現象に関与してつくられた作品が、《Infinity》と向かい合うように展示された新作《Infinity-mirage》である。



山下麻衣+小林直人「Infinity-mirage」(2021) 黒部市美術館での展示風景 [撮影: 柳原良平]

高山湖の嵐気楼は、江戸時代初期の紀行文をはじめ多くの文献で取り上げられてきたことで、《Infinity-mirage》はその景観を利用した作品だ。黒部市美術館から車で10分ほどの生地海岸の崖に設置されたオレンジ色の「m」型看板を8km先の魚津市の海岸沿いに設置されたカメラからライブ中継し、展示室の壁面に映し出すというものだ。

いつ嵐気楼が見えるかはわからないが、うまく見ると「m」の右側に反転した「m」が見え、「∞」の文字が浮かび上がる。そもそも筆者は嵐気楼の仕組みについて(作家たちも同様に)あまりよく知らなかったのだが、嵐気楼とは大気の気圧差による反転現象、つまりリフレクションされた風景が見える状態を指す。そのリフレクションの現象に目をつけた作家は、「∞」の文字を浮かび上げさせようとした。

しかし、これは人為的にいつまでも可能なのではなく、自然のあらゆる条件が重なったときにしか成立しない。それこそ二つの∞の効かない、不確かな作品であるわけだが、まさに作家はこの「不確かさ」を捉えていて、それがそのまま作品になっているという。



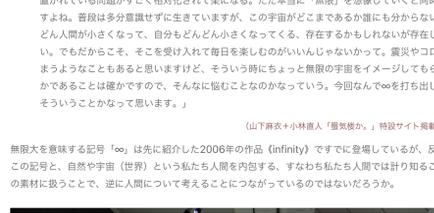
山下麻衣+小林直人「How to make a mountain sculpture - Japanese Mountains 剣岳」(2013) 黒部市美術館での展示風景 [撮影: 柳原良平]

展示室内にこの生地海岸の風景を描いた小さな絵画が展示されているのだが(上の写真参照)、そこにはパスカルの次の言葉が明記されていた。

「自然の中において、人間とは一体なんなのだろう。」

作家が自然と人間をテーマに掘り、制作を続けるのはまさにこの問いかけの答えを見つけるためではないか。

展覧会場の一番奥へ進むと、ひっそりとガラス張りの小さな観覧客あり、その窓からは一面に広がる景観が見える。それを借鏡し、縦長のモニターに夕陽のなか揺れる2本の旗を映した映像が設置されており、作品タイトル《考える輩/考えない輩》からもわかるように、ここでもまたパスカルが引用されている。



山下麻衣+小林直人「考える輩/考えない輩」(2021) 黒部市美術館での展示風景 [撮影: 柳原良平]

大きな自然のなかで静かなように心もたない人間だが、人間の尊厳は考えるところにある。しかしその考えとはなんと愚かであるか、この作品はモチーフである山を題材に、山に真摯に向き合う作家の様子は、どこか滑稽にも見え、その状況と完成した彫刻の山とが衝突されることで、大きな自然と小さな人間のような世界の構図をどこまでも考えさせられる。立山連峰のなかでもひと目立つ立々しい山、剣岳が模刻されていることと、この作品における人と自然の対比や境界を力強く感じさせた。

喘息のようでもある、脈絡のない吹き

良い展覧会というのは、作家とキュレーター、そして環境とがうまく機能しているものだ。

本展覧会はまさにそうした種類の展覧会だったと思う。黒部市美術館は小規模な館だが、展覧会自体は決してそのような印象を感じさせない、地域の資源(場所、人、物など)を活用した、とてもスケールの大きなものだった。

最後に展覧会タイトルについて触れておきたい。「嵐気楼か。」この意味深なタイトルは芥川龍之介の短編小説「嵐気楼一戒」(嵐気楼のほとり)のなかで登場人物が不意に呟いた「嵐気楼か。」という言葉から取られたそう。物語のなかで、作家のいるセリフがあるが、そちらではなく、見物客が行き、何か揺れるものを見てクエスチョンする「嵐気楼か?」というセリフが山下+小林は惹かれたという。疑問でもなく喘息のようでもある、何の脈絡もなく呟いた言葉に過ぎないかもしれないが、世の中全体のことを指して、嵐気楼のように離れて曖昧で不確かな雰囲気を通してそのひとと音が、本展覧会にもよる空気感と合致した。

不確かな自然現象のみならず、自然や宇宙のなかにいる自分たちの存在すら不確かであることを指摘する山下+小林は、その不確かさや疑問をそのまま問い掛けとして作品化する。いや、作品化というのが適切なかわからない。問いを共有するための装置、状況の提示、それが山下+小林の作品そのものなのだと思う。鑑賞者はそうした彼らの素朴な疑問を「嵐気楼か。」というこれまた不確かなタイトルによって投げかけられ、展覧会に誘われる。曖昧で不確かなものほど気になるのだ。

「人と自然とのゆらぐ境界」が一体なんなのかわからない。でも自然との向き合い方も、個人の存在のあり方も限りが違うはずで、それを各自が考える場こそ今回の展覧会の醍醐味だったのだと思う。《人(人)自然》にあるように、自分からの「(人)」の甲にどんな助詞を当てはめるだろうか。そしてどんな助詞が当てはまる未来を見てみたいだろうか。

そんなことを考えながら、寒空のなか強風に揺られるかたがた生地海岸ライブ中継に映っているかどうか必死にウェブサイトを覗いている自分がなんだか滑稽に思えてならなかった。

山下麻衣+小林直人「嵐気楼か。」

会場: 2021年9月25日(土)〜12月19日(日)
 会場: 黒部市美術館 (富山県黒部市堤町1035)
 公式サイト: <http://mirage.yamashita-kobayashi.com/>

関連情報

- 【もしもし、キュレーター?】第3回 地域のことを考えないで、美術館自体が成立しない——尺戸智佳子 (黒部市美術館) × 勝川悠 (茅ヶ崎市美術館)